
謎比べ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
謎比べ

【Nコード】
N2247S

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
スウェーデンのお話。農夫がトルと謎比べをしました。その結末は。

第一章

謎比べ

スウエーデンのある村においてです。一人の農夫が畑を耕していました。

その時にです。自分の奥さんにごう言いました。

「おい」

「おいじゃわからないわよ」

「おいといったらあれだよ」

まずはごう返す彼でした。

「あれじゃないか」

「あれって？」

「イモだよ」

「ジャガイモ？」

「それはないか？」

それを欲しいというのです。

「今からこの畑に入れるからな」

「ちよつと待つててね」

すぐに女房から返事が返ってきました。

「家の中まで取りに行つてくるから」

「ああ、頼むな」

ごうして奥さんは家の中に戻りました。農夫はまた畑を耕し続けます。そこにです。

小さくて丸々と太った中年の男がやって来ました。お鼻がやけに大きく顔と同じ位の大きさがあります。本当に大きなお鼻です。

その男がです。農夫の前に来て言うのです。

「なああんた」

「わしのことかい？」

「そう、あんただよ」

笑顔でこう農夫に言うのでした。見れば服は農夫と同じもので頭には三角の赤い頭巾を被っています。農夫を見上げて言ってきました。

「あんだだよ」

「わしに何か用かい？」

「用があるからこうして話しかけるんじゃないか」

「まあそれはそうだな」

農夫も男の今の言葉には頷きます。確かにその通りです。

「それはな」

「そうだろ。それでな」

「ああ、それで？」

「その用なんだが」

にこにことしてです。農夫に言ってきました。

「謎々をしないか」

「謎々？」

「そう、それをだよ」

こう農夫に言うのです。

「どうだい、それは」

「おいおい、謎々なんかしてどうなるんだよ」

農夫は男の言葉に首を傾げさせて返します。

「何にもならないんじゃないのかい？」

「何言ってるんだよ、楽しいじゃないか」

「楽しい？」

「そうだよ、謎々はね」

「楽しいっていうのかい」

「そうだよ。とてもいいものだよ」

これが男の言葉です。

「だからどうだい？今からね」

「そうかな」

「それともあんだ。謎々は嫌いかい」

「嫌いじゃないな」

農夫は素直に答えます。実際のところ謎々は嫌いではありません。子供の頃はよくそれで遊びました。それなりに自信もあります。

それで、です。こう男に言いました。

「それじゃあ」

「やるんだな」

「負けたら何かあるのかい？」

「負けたらかい」

「何かあるのかい？その時は」

「そうだな。負けた方が」

男は笑ってです。その時のことを話すのでした。

「ビールを奢るってのはどうだい」

「ビールをかい」

「お金とかそういうのはいいんだよ」

男はそれはいいということです。

「わしにとっちゃな」

「わしは欲しいがね」

「あんたは欲しいのかい」

「人間なら誰だってそうだろ」

これが農夫の主張です。鍬を杖にしてそれを支えにして立つての言葉です。

「そうじゃないかい？」

「まあわしは人間じゃないからな」

ここで男はこんなことを言うのでした。

第二章

「だからそういうのではないな」

「何っ、あんた人間じゃないのか」

「わしはトロールだよ」

このことを言う時も笑っています。

「この鼻を見ればわかるだろ」

「さつきから随分大きな鼻だと思っていたけれど」

トロールが指差すその大きなお鼻を見てです。農夫は言います。

「いや、そうだったのか」

「まあわしはいいトロールさ」

「人を取って食ったりはしないのかい」

「それは大きいトロールじゃないか」

そうしたトロールだということです。

「わしとはまた違うよ」

「それを聞いてほっとしたよ」

「そうだろ？それでな」

「謎々かい」

「ああ、するんだよな」

このことを確かめるトロールでした。

「そうだろ？ビールを賭けて」

「お金じゃないのが残念だけれどまあいいさ」

農夫もこれで納得したのでした。そうしての言葉でした。

「それじゃあ」

「やるかい」

「まずはわしが出すぞ」

農夫は自分から言いました。

「いいよな、それで」

「いいとも」

こうしてでした。農夫からはじめてです。お互いに謎を出し合います。農夫もトロールも全て答えていきます。そうして時間を過している。

遠くから奥さんの声が聞こえてきました。

「あんた、持って来たよ」

「おっ、来たか」

「ああ、仕事中だったんだ」

「ああ、実はな」

「それならそれと言えればいいのに」

トロールは農夫に対して苦い顔で言いました。

「全く」

「それじゃあこれで終わりだね」

「いやいや、終わりじゃないよ」

「あれっ、まだやるのかい」

「そうだよ。まだだよ」

また言うトロールでした。

「だって勝負はまだついてないじゃない」

「そういえばそうか」

「引き分けのままですら終わらせたい？」

あらためて問うてみせるトロールでした。

「そんな中途半端なのね」

「いや、こっちもそれはな」

「嫌だよね」

「中途半端はよくない」

農夫もこうトロールに答えます。

「それは絶対にな」

「じゃあまたね」

「またか」

「明日また来るから」

こう話すのです。

「それじゃあねその時はね」

「うん、じゃあな」

「それで決着がついたその時は」

「ビールをだな」

「実はわしはビールが好きなんだよ」

「トロールは楽しげに笑って話します。」

「だから。その時はね」

「飲むっていうんだな」

「そう、飲むよ」

「まだ勝負は決まってるに決まっています。こつ言っただけです。」

「どんだんね」

「まあわしもだがな」

「あんたもかい」

「ビールは飲む為にあるものだろ」

「農夫も楽しげな笑顔になってトロールに話します。」

第三章

「違うかい、それは」

「いや、その通りだよ」

「だからだよ。飲むよ」

「どんだね」

「ビールはどんだね飲むものじゃないか」

「確かにね。それじゃあね」

「わしが勝った時は覚悟しておけよ」

「そっちこそな」

こう言い合つてでした。

二人はまた謎比べをすることを約束しました。そして次の日早速です。

農夫とトロールは農夫の休憩時間に謎比べをしました。けれどこの日も決着はつきませんでした。引き分けのまま時間が終わりました。

「それじゃあ仕事に戻るからな」

「あれっ、もうなのかい」

「そうだよ。仕事にね」

「じゃあまた明日か」

「そうなるな。嫌かい？」

「いや、それでいいよ」

こう返すトロールでした。

「それでね」

「よし、それじゃあ明日な」

「明日こそはな」

「決着をつけるからな」

こう約束してそれで、です。また明日になりました。

その日はです。朝に少しでした。けれどこの時もでした。

時間切れとなつてトロールは帰ることになりました。彼はここでこう言うのでした。

「中々勝負が決まらないなあ」

「そうだな。いい加減負けたらどうだ？」

「わしがか」

「そうだよ。勝負が決まったら楽になるぞ」

「それはその通りだ」

トロールはこのことは素直に認めました。しかしこうも言うのでした。

「けれどだ。それはだ」

「勝つてこそだ」

「勝つてか」

「勝つてそれで」

どうするのかもです。トロールは言いました。

「ビールをたんまり飲まないとな」

「楽にならないのか」

「その通りだ。だから絶対に勝つ」

「それはわしもだ」

「負けてたまるか」

トロールは強い声で言います。

「だからな。いいな」

「明日か」

「明日こそビールだからな」

「やれやれ。じゃあこつちもだ」

「明日覚悟しておけよ」

「そつちもな」

こう言い合つてそれで別れるのでした。そしてそれから一週間同じことを繰り返しました。けれど決着はつかないままでした。

それが十日になり二週間になつてもです。全くでした。

奥さんがです。こつ夫に尋ねます。

「あんた最近おかしなことやってるわね」

「トロールとのあれか」

「あれ何なの？」

怪訝な顔で夫に尋ねます。

「何をしてるの」

「謎比べだよ」

それだと答える農夫でした。

「それをしてるんだよ」

「謎比べ？」

「そうだよ」

こう話す農夫でした。

「それを今やってるんだよ」

「何か子供の遊びみたいね」

「そうだな。けれどな」

「毎日やってるの」

「そうだよ、毎日な」

農夫はこうおくさんに答えます。

「やってるんだよ」

「楽しいの？それ」

「楽しいよ」

実際そうだと話す農夫でした。

第四章

「これがまたな」

「楽しいの」

「ああ、楽しい」

「そんな子供みたいな遊びが」

「いやいや、ビールを賭けてるからな」

奥さんにこのことも話します。

「勝った方がビールを飲めるんだよ」

「だからやってるの」

「ビールはわしが飲む」

農夫は決意している顔でした。

「絶対にな」

「何かと思ったらそれなの」

奥さんは御主人のその言葉を聞いて困った笑顔で言いました。

「全く」

「悪いか？」

「悪いとは言っていないわ」

「けれどその顔は」

「少し呆れてるのよ」

「そっちなのか」

「全く。何かと思えばビールなのね」

こう言ってます。その呆れた顔でまた言うのでした。

「何かを賭けてるんじゃないかって思ったけれど」

「命とかは賭けてないぞ」

「それでビールなの」

「ああ。それだと安心するだろう?」

「まあそれはね」

命のやり取りみたいな危険なものじゃなかったらいい、奥さんは

心のそこからこう思いました。けれどそれでもあえて言うのでした。

「それでもね」

「呆れるか」

「本当にビールが好きなんだから」

「向こうもビールが好きみたいだぞ」

「妖精もなのね」

「ビールは友だ」

「こうまで言います。」

「だからだ。絶対に勝ち取るからな」

「まあ頑張っつてね」

奥さんはこう御主人に言います。そうしてなのでした。

次の日もまたその次の日もです。農夫とトロールは謎比べをしました。しかしそれでもです。決着はつかないままなのでした。

それが続いてです。やがて一年になりました。

その頃にはです。農夫はこんなことを言うようになりました。

「さて、明日もだな」

「明日も謎比べね」

「ああ、するぞ」

晩御飯を食べながら奥さんに言います。樫の木で作った頑丈なお家の中で同じく樫の木のテーブルに座つてです。あつたかいスープにパンを食べながらです。奥さんに話すのです。

「明日もな」

「そしてその明日もね」

「ああ、やるさ」

「楽しげな顔での言葉でした。」

「それからもな」

「そうなの。それじゃあね」

「ああ、楽しみだよ」

「そうね。楽しんでるわね」

夫のその顔を見てです。奥さんも笑顔になっています。

「それはいいことよ」

「さて、あいつは」

トロールのことも言うのでした。

「明日はどんな謎々を出してくるかな」

「それも楽しみなのね」

「かなりな」

こう話します。

「そしてわしがそれを解くんだよ」

「そうしていくのね」

「そうさ。じゃあまた明日な」

「楽しんできてね」

こう話すのでした。農夫は謎比べが楽しくて仕方ないようになってきていました。そうしてその次の日の謎比べに心を向けるのでした。

その次の日です。お昼にでした。

お昼御飯を食べて一息ついていている農夫のところ입니다。前からとこととやって来ました。

トロールです。笑顔で彼に挨拶をしてきました。

「やあ、こんにちは」

「ああ、こんにちは」

まずは挨拶からでした。

「元気そうだね」

「お互いにな」

「それじゃあ今日もやるか」

トロールからの言葉でした。

「それでいいよね」

「ああ、いいとも」

農夫は岩の上に座っていました。そのうえでトロールの言葉に応えます。

「それじゃあ早速な」

「やるか」

「今日も負けないからな」

「こっちこそな」

二人は笑顔で言い合いそのうえで謎比べをするのでした。それはこの日だけでなく次の日もその次の日もです。ずっと楽しく続けていくのでした。ビールのことは何処かに忘れてしまっていていてもです。

謎比べ

完

2010・11・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2247s/>

謎比べ

2011年4月4日22時55分発行